

「正論大賞」 受賞者の声

織田邦男

この度、図らずも「正論大賞」をいただくことになりました。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。大変名誉に思うと共に、喜び半分、戸惑い半分といったところです。

「正論大賞」とは、フジサンケイグループが主催する賞であり、自由と民主主義を守り、個人と国家の尊厳がともに大切にされる社会を築くため「正論路線」に共鳴し、傑出した言論活動を行ったオピニオンリーダーに贈る賞と聞いています。

37回にわたる歴代受賞者を見ますと、小生など足下にも及ばない、はるか遠くに仰ぎ見る知的巨人のような先生ばかりです。

片や小生は、学者でも文化人でもなく、ただの元自衛官。強いて言えば約40年間、国防の最前線で戦闘機操縦者として「自由と民主主義を守り、国益を第一に考え」、日本を守ってきた現場の人間。浅学菲才の元自衛官が果たして「正論大賞」を貰っていいものかと。

昨年8月、「正論」の執筆陣に加わるよう電話をいただきました。「正論」とは読むものと思っていた小生にとって、これまた晴天の霹靂でした。

しかしながら、日本に15万人に一人しかいない「絶滅危惧種」的な戦闘機乗りの目線で見えた世相について、世に問うのもいいかとお引き受けしました。

昨年9月から十数回、執筆しましたが、「よくぞ言ってくれた」という反響が多いのが気になります。「言いたくても言えない」という日本の言論空間の異常さの証左だからです。

戦後77年が経ちますが、日本は未だに「軍事」は忌避され、「核」はタブー視される「空気」に支配されています。「平和を欲するなら戦争を準備せよ」という箴言さえ、堂々と語れないのが現実です。

国防に奉職してきた元自衛官が、タブーなく「軍事」「核」「安全保障」を語る。おこがましいことですが、ここに執筆者としての存在意義があるのかもしれない。分不相応ともいえる今回の受賞を叱咤激励と捉え、引き続き「正論」を主張していきたいと思えます。